

モンゴル語 3 人称後接語のトピック標示/焦点標示*

橋本 邦彦

The Third Person Proclitic as Topic/Focus Markers in Mongolian

Kunihiko HASHIMOTO

要旨 : There is a third personal proclitic following any noun phrases in Mongolian. The proclitic, *n'*, holds eight functions other than the possessive pronoun function as a prototype: anaphora; partitive; agent; conjunct; modality; nominalizer; topic marker; focus marker. Among them the possessive pronoun, the topic marker and the focus marker seem to form a unified group. The purpose of this article, observing a sufficient number of data of *n'* in detail, is to explicate the fact that these three functions compose a cline which shows a gradual change from the possessive pronoun to the topic marker to the focus marker.

キーワード : proclitic, topic, focus, referentiality, specificity, prominence

1. はじめに

所有後接語は、名詞に後置し、その名詞を修飾する所有代名詞である。

(1) a. Aav min' modon sandal xij-sen.

父:∅ 1P 木の いす:∅ 作る-PF¹⁾

私の父は木製のいすを作りました。<K&Ts: 377>²⁾

b. Bagš čin' čamajg duud-a-ž baj-na.

先生:∅ 2P 君を:ACC 呼ぶ-EP-ICC いる-PRS

君の先生が君のことを呼んでいます。<H: 123>

c. Egč n' Darxan-d suu-dag.

先生:∅ 3P ダルハン-D/L 住む-HBT

彼/彼女の姉はダルハンに住んでいます。

(1a)では 1 人称の、(1b)では 2 人称の、(1c)では 3 人称の所有後接語が、それぞれ主格形名詞に付加して、全体で主語名詞句を構成している。

所有後接語は主格形以外の格形の名詞にも後続する。ここでは、3 人称所有後接語に限定して例文を挙げるが、他の人称でも並行したふるまいをする。

- (2) a. Bi Bat-taj zaxildl-aar xarilts-ya getel xayag-ij n'
私は バト-CMT 手紙-INS 連絡する-VLT けれども 住所-ACC 3P
med-e-x-güj baj-na.
知っている-EP-NPS-NEG いる-PRS
私はバトと手紙で連絡しようとしたのですが、彼の住所を知りません。
- b. Mod egč-ijn-x n' xöl-ijg tsoxi-čix-son.
木:∅ 姉-G-POSS 3P 足-ACC ぶつかる-CMP-PF
木が彼/彼女の姉の足にぶつかってしまいました。<K&Ts: 123>
- c. Bi Dorž-ijg ger-t n' xürg-e-v.
私は ドルジ-ACC 家-D/L 3P 送り届ける-EP-PST
私はドルジを彼の家に送り届けました。<K&Ts: 123>
- d. Sürmaa-g mord-ood yav-a-xad bor trogon deel-tej
スルマー-ACC 馬に乗る-PCC 出かける-EP-TM 灰色の 絹の 長服-CMT
Bunyaa guaj xojn-oos n' süü örg-ö-ž baj-v.
ボニャー:∅ ~さん 後ろ-ABL 3P 乳:∅ 捧げる-EP-ICC いる-PST
スルマーが馬に乗って出かけると、灰色の絹の長服を着たボニャーさんが、彼女の背後から乳を供物として捧げていました。<MX: 110>
- e. Daraax' üg-s-ijg ündes dagvr-aar n' zadal.
次の 語-PL-ACC 語根:∅ 接尾辞-INS 3P 分割する:∅
次の語を語根と接尾辞に分割しなさい。<MX: 5>
- f. Minij mor' mor'-toj n' xamt yav-žee.
私の 馬:∅ 馬-CMT 3P 一緒に 出かける-PPST
私の馬は彼/彼女の馬と一緒に出かけました。

(2a)では対格形に、(2b)では属格形に、(2c)では与位格形に、(2d)では奪格形に、(2e)では具格形に、(2f)では共同格形に、各々、3 人称所有後接語が後続している。

モンゴル語は名詞の後ろに後置詞を要求する言語であるが、後置詞句全体を所有後接語は修飾することができる。

- (3) a. Ger lüü n' yav-tsgaa-ya.
家:∅ ~へ 3P 行く-CLC-VLT
彼/彼女の家へ行きましょう。<K&Ts: 107>
- b. Dorž ter xoyor xüüxd-ijg xoorond n' zog-o-ld-uul-žee.
ドルジ:∅ その 二人の 子供-ACC ~の間に 3P ぶつ-EP-RCP-CST-PPST

ドルジはその二人の子供たちを、彼らの間で互いに叩き合わせました。

c. Xerev Buyannemev Lenin-ijg tar'-san-san bol sandal
もし ボヤンネメフ:Ø レーニン-ACC 見知っている-PF-PF CND いす:Ø
deer n' suu-x-güj baj-san.

～の上に 3P すわる-NPS-NEG いる-PF

もしボヤンネメフがレーニンを見知っていたなら、彼のいすにすわったりはしなかつただろう。

(3a)~(3c)では空間関係を示す3つの異なる後置詞に後接語が付加している。

ここまでの所で留意しておきたい点は、(1)、(2)、(3)の各文からわかるように、所有後接語は主語以外の名詞を指示対象とし、主語と同一指示関係を結ぶことはけしてないということである。主語と同一指示的な所有関係を結ぶ場合は、(4a)のように再帰所有接尾辞-aa⁴を用いる³⁾。(4b)のように所有後接語を用いると、同一文中の対格形名詞句か、文外の対象を指示すると解釈される。

(4) a. [Bi]_α [Dorž-ijg]_β [ger-t-ee]_α xürg-e-v.

私は ドルジ-ACC 家-D/L-RFL 送り届ける-EP-PST

私はドルジを自分の家に送り届けました。

b. [Bi]_α [Dorž-ijg]_β ger-t [n']_{β/γ} xürg-e-v.

私はドルジを彼の家を送り届けました。

以上の観察から、所有後接語に関して、次のような統語的、意味的特徴を抽出することができる。

(5) 所有後接語の統語的特徴：名詞句 + _____

(6) 所有後接語の意味的特徴：

- ① 主語以外の指示対象と同一指示関係を結ぶ。当該指示対象は同一文中にあっても、同一談話内にあっても、非言語的文脈内にあってもよい。
- ② 意味特性は、【人称性】、【所有性】、【指示性】の3つである。

(5)と(6)の特徴を余すところなく顕現するものがプロトタイプの所有後接語になるわけだが、本稿で扱う3人称所有後接語には、プロトタイプからはずれるような複数の異なる機能が存在している。

(7) a. 照応的指示：

[Tüünijg]_α ger-t-ee xari-xad busand [n']_α yariaa-g-aa ülgelžlüül-žee.

3SG:ACC 家-D/L-RFL 帰る-TM 他の人々 3P 話-EP-RFL 続ける-PPST

彼が自分の家に帰った時、他の人々は話を続けていました。

b. 部分詞：

Tednees 4 n' ir-sen-güj.

3PL:ABL 3P 来る-PF-NEG

彼らのうち 4 名が来ませんでした。<K&Ts: 91>

c. 行為者標示：

[Tsetseg-ijg]_a ger-t-ee xari-ž yav-a-xad [n']_a genet Baatar

ツェツェグ-ACC 家-D/L-RFL 帰る-ICC 行く-EP-TM 3P 偶然 バートル:ø

dajralg-a-žee.

出会う-EP-PPST

ツェツェグが自分の家へ帰って行くと、偶然、バートルと出会いました。

d. 接続詞：

Ger-t-ee xari-ž ir-sen n', manaj üüden deer ulaan torgon

家-D/L-RFL 帰る-ICC 来る-PF 3P 1PL:G ドア+ ~の上に 赤い 絹:ø

alčuur-taj büsgüj zogš-o-ž baj-na.

スカーフ-CMT 女性:ø 立つ-EP-ICC いる-PRS

家に帰って来ると、私の家のドアのところに赤い絹のスカーフを着けた女性が立っているのです。<Street 1962>

e. モダリティ標示：

Güj-sxij-g-eerej, bid xoži-gd-o-x n'!

走る-QUK-EP-OPT 私たちは 遅れる-PSV-EP-NPS 3P

もう少し早く走りましょう。私たちは遅れてしまいますよ。<K&Ts: 131>

f. 名詞化：

Ene бага-d n' id-e-x yum ög-ööč.

この 小さい-D/L 3P 食べる-EP-NPS もの:ø 与える-IMP

この小さい子供に食べるものをあげなさい。<K&Ts: 213>

g. トピック標示：

Xaruul n' benzin xulgajl-ž baj-g-aad ami-aa ald-žee.

警備員:ø 3P ベンジン:ø 盗む-ICC いる-EP-PCC 命-RFL 失う-PPST

警備員がベンジンを盗んで命を落としました。<ÖS: 1999.9.22>

h. 焦点標示：

Ene surguuli-ijn zaxiral n' bi baj-na.

この 学校-G 長:ø 3P 私は ある-PRS

この学校の校長は、私です。<K&Ts: 374>

(7a)は n' が前方照応的指示代名詞として機能し、副詞節の主語 tüünijg と同一指示関係を結んでいる。(7b)の n' は部分詞で、「彼ら」の集合から 4 名のメンバーを抜き出す働き

をしている。(7c)の n' は副詞節の末尾に付き、主語 Tsetseg-ijg と連動して「帰っていく」行為の主体を表す。その際、n' と主語は前方照応的な指示関係にあるが、(7a)の場合とは異なり、同一節内というより狭い範囲で成立している。(7d)は Street (1962)で「絶対所有連鎖」と呼ばれているもので、n' が完了形動詞に後接して、節と節とを連結する役割を演じている。(7e)は n' が文末に現れ、近接未来を表示するモダリティ要素になっている。(7f)は n' が与位格形形容詞句に付加して、それを名詞化する。ちょうど、英語の名詞代用形 one と類似した意味が付与される。(7g)は新聞の見出しから抜粋された例であるが、n' に先行する名詞 xaruul「警備員」はトピックとして取り立てられ、これを巡って後に続く記事の内容が展開していく。(7h)の n' は(7g)とは反対に、述語に立つ要素を際立たせる焦点標示で、英語の分裂文の it~that に対応した働きをする。

橋本(2006)は、プロトタイプ機能を含めた8つの機能が、1つのネットワークを構成して関連し合っている事実を明らかにしたが、そこでは3人称所有代名詞、トピック標示、焦点標示は1本の系列を形成している。これら3つの機能を具現しているデータをつぶさに観察すると、各々が独立した島として存在しているのではなく、境界領域をあいまいにしながら段階的に移行していく連続体を構成している事実気付く。そこで、本稿は、この3つの機能の移行の様子を明らかにすることを主な目的とする。さらに、それに付随して、名詞化の機能が関連することを指摘し、説明を加える。

第2節では3人称所有代名詞からトピック標示への移行について見ていく。第3節で名詞化機能との関係に言及し、第4節でトピック標示から焦点標示への移行について考察する。第5節で名詞化を加えた4つの機能が(5)の統語的特徴を保持しながら(6)の意味的特徴、特に意味特性の数や度合いを変えながら、互いに関連し合った漸次的連続体(cline)を形成することを結論として提示したい。

2. 3人称所有代名詞からトピック標示への移行

3人称所有後接語が3人称所有代名詞として用いられる場合、(5)、(6)で言及した統語的、意味的特徴をすべて満たしている。特に、(6)②で挙げた意味特性、すなわち【人称性】(ここでは【3人称性】)、【所有性】、【指示性】は、(8a, b)に見るように、余すところなく具現している。その意味で、所有代名詞用法はプロトタイプであると言える。

(8) a. Aav n' Yapon, eež n' tajvan' garaltaj.

父親:Ø 3P 日本:Ø 母親:Ø 3P 台湾:Ø 出身である

彼の父親は日本、彼の母親は台湾出身です。<ÖS: 1999.11.18>

b. Bi eež-eer n' üs-ee zas-uul-dag.

私は 母親-INS 3P 髪-RFL 刈る-CST-HBT

私は彼/彼女の母親に髪を刈ってもらいます。<K&Ts: 107>

所有代名詞として用いられる n' が、トピック標示へと移行していると考えられる例が

ある。

(9) a. Xovd-oor yav-bal dursgalt gazar n' zügeer yum.

ホブド-INS 行く-CND 記念の 場所:Ø 3P たくさん ASR

ホブドに行くと、名所がたくさんあります。<S&B: 136>

b. Üneg neg gavar-taj baj-žee. Gavar n' ulaan šargal

キツネ:Ø 1つの 子ギツネ-CMT いる-PPST 子ギツネ:Ø 3P 赤い 黄色っぽい

Ünegxen xüü yum-san-žee.

子ギツネちゃん 子供:Ø ASR-PF-PPST

キツネが一匹の子ギツネと一緒にいました。その子ギツネはウネグヘン（子ギツネちゃん）と呼ばれていました。<U: 10>

(9a)の主節主語に後続する n'は、副詞節の具格形名詞句を指示する点で【指示性】をもつが、【人称性】と【所有性】は後退している。同様のことは、(9b)の異なる文同士の間でも観察できる。第2文の主語 gavar n'は、第1文の共同格形名詞句 neg gavar-taj を再度採り上げる働きをしている。ここでも n'は指示的であるが、【人称性】と【所有性】は希薄である。

(9a, b)の n'は、先行する語を取り立てて後続の述語へと橋渡しをするトピック標示の機能を帯びていると言える。

【指示性】の度合いがさらに低くなっている例が存在する。

(10) a. Dorž-ijn ax n' Darxan xot-o-d barilgačin.

ドルジ-G 兄:Ø 3P ダルハン:Ø 市-EP-D/L 建築家:Ø

ドルジの兄はダルハン市の建築家です。

b. Tednij neg n' üünijg bičigč.

彼らの 1人:Ø 3P これ:ACC 書き手:Ø

彼らの1人はこれを書いた人です。<L: 196>

(10a)では主要部 ax が固有名詞属格形 Dorž-ijn で修飾されている。固有名詞はそれ自体で唯一的な指示性を有するので、さらに n'で指示性を付与する必要はない。【人称性】も【所有性】も属格形名詞句に含意されているので、n'の意味特性としては完全に背景化されている。同様の説明は、(10b)にも適用されるのである。

【指示性】は、3人称所有後接語の3つの意味特性の中で最も保持されやすいものであると考えられるが、この特性すら完全に失われている例を見出すことができる。

(11) a. Temee n' gov'-d zoxild-son baj-dag učraas manaj uls-iyn

ラクダ:Ø 3P ゴビ-D/L 適応する-PF いる-HBT ~ので 私たちの 国-G

govi-ijn ajmg-uud-a-d temee-g oln-oor üržüül-ne.

ゴビ-G 県-PL-EP-D/L ラクダ-ACC たくさん-INS 繁殖させる-PRS

ラクダはゴビに適応しているので、わが国のゴビ地方の県では、ラクダをたくさん繁殖させています。<MX: 84>

b. Buuz ge-deg n' max-taj xool yum.

ボーズ:∅ 言う-HBT 3P 肉-CMT 料理:∅ ASR

ボーズというのは、肉料理です。<K&Ts: 372>

c. A: Xudaldagč aa, ene bor tsaas-a-n-d boodol-toj yum čin' yuu ve?

店員:∅ VOC この灰色の紙-EP-n-D/L 包み-CMT もの:∅ 2P 何:∅ Q

店員さん、この灰色の紙に包んであるものは何ですか。

B: Ene n' tsagaan budaa, ter n' elsen čixer.

これ:∅ 3P 米:∅ それ:∅ 3P グラニュー糖:∅

これはお米、それはグラニュー糖です。

(11a)は冒頭の文で、主語 *temee* 「ラクダ」は初めて導入されるのだから、*n'*の指示できる対象は先行文脈には存在しない。*n'*は「ラクダ」をトピックとして取り立てることで、後に続く文章はこれをめぐって展開していくのである。

(11b)は主語名詞句内に習慣形動名詞が現れている。これにより文は総称文と解釈される。総称文には特定の指示対象はないのだから、*n'*の指示性もないということになる。*n'*は「ボーズ」をトピックとして取り立てて、述語でのコメントを導く働きをしている。*ge-deg n'*はちょうど英語のトピック標識 *as for* と機能上類似している。

(11c)は客の質問に対する店員の応答の中で *n'*が用いられている。2人の視野に収まる特定の対象について、店員が直示して応えているのだから、*n'*は当然十分に指示的のように思われるが、実は、指示代名詞 *ene* 「これ」、*ter* 「それ」に強い指示性が固有に備わっているので、*n'*の指示性は余剰的である。むしろ、「これ」で指すものと「それ」で指すものを取り立てて対比させる機能の方に *n'*の重心がかかっているのである。

(11a-c)は、3人称所有後接語 *n'*が本来持っているはずの3つの意味特性を完全に失い、トピック標示として専ら名詞句を取り立てる働きに移行している事実を証明している。

3. 名詞化機能とトピック標示との関係について

3人称所有後接語 *n'*には、形容詞や動名詞に付加して全体で名詞句を形成する名詞化機能がある。橋本(2006)では、機能のネットワークとして《3人称所有代名詞》→《名詞化》の系列を指摘し、《トピック標示》との関連性には触れなかったが、名詞化現象をよく見ると、まったく無関係とは言い切れないように思われる。

(12) a. Sajn n' duul-a-x xeregtej.

よい 3P 歌う-EP-NPS 必要がある

よい人は歌わなければなりません。<K&Ts: 371>

- b. Ger bül-ijn xoyor mergežil adil baj-x n' neg tal-aas ayatajxan.
家族-G 二人の 職業:∅ 似た いる-NPS 3P 一つの 面-ABL かなり愉快的な
家族の二人の職業が似ているというのは、ある面でかなり面白いです。

<ÖS: 2001.2.23.>

- c. Činij ert ir-sen n' ix sajn.
あなたの 早く 来る-PF 3P とても よい
あなたが早くに来たことは大変結構です。<K&Ts: 142>

(12a)は形容詞 sajn と n'の組み合わせで「よい人」という名詞句を作っている。この点で、n'は英語の名詞代用形 one や、the rich 「お金持ち」、the beloved 「最愛の人」に見られる定冠詞 the と機能上の共通点を見出すことができる。

(12b)は非過去形アスペクト接尾辞-xに導かれる動名詞句全体を統括する働きをn'が果たしている。これは、英語の補文化辞 that、日本語の形式名詞「～こと」と類似している。(12c)は完了形アスペクト接尾辞-senの動名詞句の例で、(12b)と同様の説明を適用できる。

(12a-c)の名詞化機能は、ある属性を備えた対象を浮かび上がらせたり、状態や行為を一つの出来事として輪郭を与えたりするのだから、トピック標示と表裏一体の関係にある。属性、状態、行為をモノ/コトとして取り立てた上で、それについてコメントするのである。このことは、習慣形アスペクト接尾辞-dag⁴に後続するn'の例からはっきりと確認できる。

- (13) A: Tsermaa ge-deg n' emegtej xün üü?

ツェルマー:∅ 言う-HBT 3P 女性の 人:∅ Q

ツェルマーというのは女性ですか。

- B: Ügüj, eregtej xün.

NEG 男性の 人:∅

いいえ、男性です。<ÖS: 2000.2.1.>

(13A)の習慣形言述動詞は、先行名詞句をメタ言語的に取り立てる役割を演じている。n'は主語名詞句+習慣形言述動詞全体に後続することで、トピック表示の機能を帯びているのである。このn'は習慣形アスペクト接尾辞に導かれる動名詞句全体を統括する名詞化の機能と、その名詞句を取り立ててトピック化するトピック標示の機能を併せ持っているということができよう。名詞化とトピック標示は密接に関連しているのである。

4. トピック標示から焦点標示へ

トピック化された名詞句は、話し手に同定可能か、話し手と聞き手の両方に同定可能

な対象を指示する。その意味で、特定の(specific)な性質をもつ(橋本 1987, 1999)。また、この名詞句は取り立てられているので、卓立性(prominence)の高い構成素である(Lambrecht 1994)。

一方、述語は、トピックについての情報を展開したり、新たな情報を付け加えたりするのだから、少なくとも聞き手にとっては、新しい、非特定の(nonspecific)な性格を有すると考えられる。この非特定のな情報を叙述する働きを、コメント(comment)、あるいは評言(rheme)と呼ぶ(Halliday 1967a, b, 1968)。

トピック文をトピックとコメントから構成された情報構造として捉えると、次のようになる。

(14) 情報構造から見たトピック文：

[主語：トピック/【+特定の、+卓立的】] + [述語：コメント/【-特定の、-卓立的】]

他方、焦点化された文は、(14)のトピック文とは対称的に、主語と述語の特定性と卓立性の値が、それぞれ反転する。

(15) 情報構造から見た焦点文：

[主語：前提/【-特定の、-卓立的】] + [述語：焦点/【+特定の、+卓立的】]

焦点文では、主語は枠(frame)を設定する前提(presupposition)として機能するのに対して、述語はその枠に入る値を指定する焦点(focus)の役割を担っている。(14)と(15)に見られる情報構造の反転は、認知言語学で論じられている「図と地の反転」(山梨 2000)の一つと見なすことができるだろう。図と地の反転は、同格型のコピュラ文で生じ易い。同格文は、主語の指示対象と述語の指示対象とが等価である事実を示す文であるが、実は、二つの異なる機能を持っている。一つは、同定化(identification)の機能で、(16)のようなトピック文で見受けられる。もう一つは、指定化(specification)の機能で、(17)のような焦点文で認められる。

(16) Tom is the principal of this school.

a. [Tom: TOPIC/【+specific, +prominent】] + [the principal: COMMENT/【-specific, -prominent】]

b. Tom -----> the principal of this school

IDENTIFICATION

(17) The principal of this school is Tom.

a. [The principal of this school: PRESUPPOSITION/【-specific, -prominent】] +

[Tom: FOCUS/ 【+specific, +prominent】]

b. the principal of this school <----- Tom

SPECIFICATION

(16)の主語 Tom は、話し手にとっても聞き手にとっても同定可能な指示対象であり、卓立的である。この対象について、述語名詞句は聞き手にとって新しい非特定のな情報を提示するわけである。

それに対して、(17)の主語 the principal of this school は、聞き手にとっては新たに枠を設定する働きをしており、この枠に入るべき値 x は未知の非特定のな対象である。この x について述語名詞句が指定するのであるが、これは話し手と聞き手双方にとって特定のな指示対象である。さらに、述語の叙述によって初めて x の正体が明かされるのだから、卓立的でもある。主語と述語の叙述の方向が、(16b)、(17b)に見るように、正反対である点にも留意したい。

以上の同格文の機能上の違いは、モンゴル語の文でも観察できる。

(18) a. Čimed bagš n' xuul'-ijn salbar-iyŋ tenxm-ijn erxlegč.

チメド:Ø 先生:Ø 3P 法律-G 学部-G ホール-G 主任:Ø
チメド先生は法学部長です。

b. Süxbaatar-iyŋ talbaj n' xot-iyŋ tüüx-ijn dursgalt gazr-uud-iyŋ neg.

スフバートル-G 広場:Ø 3P 市-G 歴史-G 記念の 場所-PL-G 一つ:Ø
スフバートル広場は歴史的な記念の場所の一つです。

(18a, b)の同格型コンピュータ文は、同定化の機能をもつトピック文である。(18a)の主語「チメド先生」は、話し手と聞き手双方にとって既知の特定のな対象を指示し、卓立性が与えられている。この主語に述語「法学部長」が唯一的に引き当てられる。述語の伝える情報は聞き手にとって新しく、主語に関してコメントの役割を担っている。(18b)についても、同様の説明が適用できる。

(18a, b)の主語と述語を入れ替えると、知的な意味は変わらないが、情報構造は反転する。

(19) a. Tegexed xuul'-ijn salbar-iyŋ tenxm-ijn erxlegč n' Čimed bagš.

当時 法律-G 学部-G ホール-G 主任:Ø 3P チメド:Ø 先生:Ø
当時、法学部長は、チメド先生です。<ÖS: 2001.3.6.>

b. A: Ulaanbaatar xot-iyŋ töv-d yamar yamar sonirxoltoj gazar

ウランバートル:Ø 市-G 中心-D/L どんな どんな 興味深い 場所:Ø

baj-dag ve?

ある-HBT Q

ウランバートル市にはどのような面白い場所<複数>がありますか。

B: Xot-iyn tüüx-ijn dursgalt gazr-uud-iyn neg n' Süxbaatar-iyn talbaj.

市-G 歴史-G 記念の 場所-PL-G 一つ:ø 3P スフバートル-G 広場:ø
市の歴史的な名所の一つは、スフバートル広場です。<S&B: 53>

(19a, b)も同格型コピュラ文であるが、指定化の機能をもつ焦点文である。(19a)では主語「法学部長」が聞き手にとって未知の値 x の収まる枠を設定し、特定の述語「チメド先生」がその枠に入る値として指定される。同様の説明は、(19b)にも適用できる。

(19a, b)では、主語は聞き手にとって非特定のであるがゆえに、卓立性を帯びていない、いわば空の容器のようなものである。この容器にぴったり収まる対象が、述語によって明らかにされるわけであるから、指定化の過程で卓立性を付与されるのである。

n'の後ろが焦点の位置になり得る事実は、次の疑問文からも確認することができる。

(20) Ta nar-iyn xamgijn öndör n' xen be?

あなたは PL-G もっとも (背の) 高い 3P 誰:ø Q

あなたたちの中で一番背が高いのは誰ですか。<G&B: 170>

疑問詞 xen は、特定の指示対象を指定する変項であるので、焦点の位置に典型的に現れる。(20)は同格型コピュラ文で、「あなたたちの中で一番背が高い者」の枠に収まる特定の値を求めているのである。

(16) - (19)に見るように、文法構造自体にはいささかの変更もないにもかかわらず、n'の前後の名詞句が入れ替わることで情報構造の反転が起こり、トピック文が焦点文へと切り替わるのである。この切り替えは、主語が説明的記述を多く含むほどに、容易なものになっていく。

(21) a. Tavi-aad nas xürtel nasan turš-aar zov-son Doloodloj-n

50-約~ 年齢:ø ~まで 年齢+ ~に沿って-INS 苦労する-PF ドロードイ-G

xoyordugaar bayar n' ene bilee.

第二の 喜び:ø 3P これ ~であった

50歳位になるまで年相応に苦労してきたドロドイの第二の喜びは、これでした。

<MX: 98>

b. Mongol xel-nij büleg dotor mön xed xeden yastan

モンゴル 言語-G グループ:ø ~の中で 実際に いくつかの 民族:ø

bagt-a-na. Edgeer yast-niy xamgijn olon too-toj n'

収まる-EP-PRS これらの 民族-G 最も たくさんの 数-CMT 3P

xalx-čuud.

ハルハ-PL

モンゴル語のグループの中には、実際は、いくつかの民族が収まっています。

これらの民族の中で最も数の多いのは、ハルハ人です。<HA: 130>

(21a)は主語により「ドードロイの第二の喜び」という枠を設定した上で、その枠に適合する値を直示的な指示代名詞「これ」で指定している。(21b)は談話レベルの例である。先行文で前提情報を記述してから、後続文の主語がその情報を受けた上で特定の枠を設定し、述語の「ハルハ人」をその枠に入る値として指定している。

(21a, b)いずれの場合にも、主語はそれだけで、あるいは先行文などの文脈情報と一緒にあって、十分な量の説明的な内容を盛り込むことで、前提の枠の範囲を狭め、そこに収まる値を指定し易くする。この指定化は、枠の範囲が狭いほど卓立性の度合いを強めていく。また、指定される値が聞き手にとってアクセスし易いほど、卓立性の度合いが強くなっていく。

プロトタイプの焦点文は、主語に説明的な動名詞句を用いるときに得られる。

(22) a. Üjlčilgee-g ezen-d n' šuud xürg-e-ž, xarjuutslag-iyg n'
サービス-ACC 顧客-D/L 3P 直接に 届ける-EP-ICC 責任-ACC 3P
öör-t n' üürüül-e-x n' zax zeel-ijn zarčim.
自分-D/L 3P (肩・背に担いで) 運ぶ-EP-NPS 3P 市場-G 原理:∅
サービスを顧客に直接届けて責任を自ら負うことが、市場原理です。
<ÖS: 2000.3.10.>

b. Mön l gants neg xün üg xel-sen č xurl-iyg
同じ ~だけ ただ~だけ 一人の 人:∅ 言葉:∅ 言う-PF ~さえ 会議-G
uur am'sgal-iyg evd-e-ž čad-aa-güj n' medeež.
雰囲気-ACC 壊す-EP-ICC ~できる-IMPF-NEG 3P 常識:∅
同じたった一人の人だけが発言したとしても会議の雰囲気を損ねることなどあり
得ないというのは、常識です。<ÖS: 2001.3.27.>

(22a)の主語には非過去形動名詞句が現れおり、ある概念の定義を行なっている。その定義内容に適合する術語として、述語の位置で「市場原理」が指定されている。同様に、(22b)の未完了否定形動名詞句の主語も、ある概念の内容説明をしていて、その内容に対応するものとして「常識」が指定されているのである。いずれの場合も、前提と焦点の語順が対称的ではあるものの、英語の it 分裂文と並行した機能を果たしていると考えられる。

(23) 焦点文の情報構造から見た英語とモンゴル語の語順：

a. 英語： It is + [焦点] + that + [前提]

b. モンゴル語： [前提] + n' + [焦点]

焦点要素が(22a, b)のような普通名詞句ではなく、より指示性の高い名詞句である例が存在する。

- (24) ANU-d sur-č baj-xd-aa serüütsüül-e-x undaa-niy
USA-D/L 学ぶ-ICC いる-TM-RFL リフレッシュする-EP-NPS 飲み物-G
surtalčilgaan-d orolts-son n' tüünij axniy uran büteel.
広告-D/L 参加する-PF 3P 彼の 初めて-G 作品:∅
アメリカで学んでいる時に、清涼飲料の広告に入選したのが、彼の初めての作品な
のです。<ÖS: 1999.11.18.>

(24)の主語の位置には完了形動名詞句が現れており、ある対象についての説明をしている。この対象の正体を聞き手は知らない。n'の後の述語名詞句により、初めてその正体が判明するのである。

焦点要素の指示性の度合いが最大になると、直示的な指示代名詞が述語の位置を占める。

- (25) a. Ene olon max-n-aas av-maar n' ene baj-na.
この たくさんの 肉-n-ABL 買う-DSR 3P これ:∅ ある-PRS
これらのたくさんの肉の中で買いたいのは、これです。<K&Ts: 152>
b. 100 xuv-ijn gadn-iy xöröngö oruulalt-taj sanxüü-g-ijn bajguullaga
パーセント-G 外の-G 財産:∅ 投資-CMT 予算-EP-G 組織:∅
xödöö oron nutag-t anx udaa baj-g-aa bajguul-a-gd-a-ž
地方:∅ 郡部-D/L 最初の ~回 いる-EP-IMPV 創設する-EP-PSV-EP-ICC
n' ene.
3P これ:∅
100 パーセント外国資本の財務組織が地方郡部で初めて創設されたのが、これ
です。<ÖS: 2000.5.22.>

(25a)は、聞き手の眼前に並んだ肉の中から、話し手が特定の肉を指しながらの発話である。述語の指示代名詞の示す対象にスポットライトが当てられる効果により、強い卓立性が付与されるわけである。同様に、(25b)も、主語が前もって背景情報を提供した上で、聞き手にもアクセスできる範囲にある対象を直示する。それによるスポットライト効果が、卓立性を鮮明にしてくれるのである。

これまで見てきた例は、通常の平叙文を倒置したもので、最初に内容について叙述した後に、その叙述内容にふさわしい特定の値を述語が指定するという構図をとっている。この構図の中心にある n'の後ろの焦点位置に、名詞句以外の要素が来ても、卓立性は付与される。

- (26) a. Surgalt-iyen töv-d onts sur-č baj-san n' ünen.
学説-G 中心-D/L 特に 学ぶ-ICC いる-PF 3P 本当の
その学説の中心地で特に学んでいたというのは、本当です。<ÖS: 2001.3.27.>
- b. Sanaand oromgüj namtar-taj xümüüs bidnij dund čimee šuugjaan
想像できない 体験談-CMT 人々:ø 私たちの ~の中に 音:ø 音:ø
bagatajxan až tör-ž yav-a-x n' olontaa.
かなり少ない 暮らす-ICC 行く-EP-ICC 3P しばしば
信じられないような体験談を持った人々が私たちの中にひっそり暮らしているこ
とは、しばしばです (しばしばあります)。<ÖS: 2000.1.19.>

(26a)では述語に形容詞が現れている。完了形名詞句で叙述された内容に、最終的な真偽判断を下している読みで、述語に卓立性が与えられることで、判断の重み付けが可能となる。(26b)では頻度の副詞が述語として用いられている。この副詞は本来、主語の動名詞句の中にあってもよいものである。例えば、この動名詞句を現在形の平叙文に書き換えると、(27)のように、主語の後に置くことができる。

- (27) SUBJECT[Sanaand oromgüj namtar-taj xümüüs] olontaa PREDICATE[bidnij dund čimee
šuugjaan bagatajxan až tör-ž yav-na].
行く-PRS

信じられないような体験談を持った人々が、しばしば、私たちの中にひっそり暮らしています。

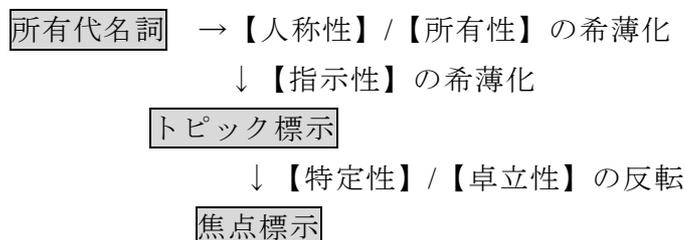
(26b)は、(27)を非過去形動名詞化した上で、頻度の副詞 olontaa を n' の後ろの焦点位置に移動してできた焦点文であると言える。

5. むすび

3 人称所有後接語の本来の機能は、所有代名詞として先行名詞句を修飾限定することである。この機能の場合、n' は【人称性】、【所有性】、【指示性】の意味特性を余すところなく備えている。3 つの意味特性のうち最初に【人称性】、【所有性】が希薄になっていき、次いで【指示性】の度合いが弱くなっていく。3 つの意味特性の希薄化の程度が進むほど、n' はトピック標示要素としての色合いを深くする。トピック標示の機能を帯びると、その前後の主語と述語の情報構造が関与してくるようになる。主語は【特定性】と【卓立性】がプラスの値を持ちトピックとしての性格を付与されるのに対して、述語は両方ともマイナスの値でコメントとしての性格を求められる。このプラスとマイナスの値が主語と述語の間で入れ替わると、情報構造の反転が生じ、n' は焦点標示要素に変わるのである。つまり、n' は、トピック標示では先行の主語との間で強い関係性を示すのに対し、焦点標示では後続の述語との間で強い結びつきを見せるわけである。以上の

ことを図示すると、次のようになる。

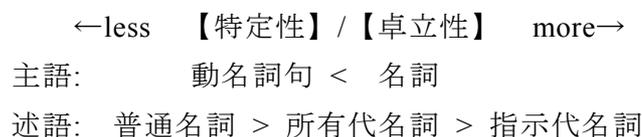
(28) 3人称所有後接語 n'の機能の移行：



(28)で示された機能の移行は離接的になされるのではなく、各意味特性、情報特性の度合いを徐々に希薄化させながら、連続的、段階的になされていくのである。

主語が前提、述語が焦点としての性格を帯びると、【特定性】と【卓立性】の度合いが、主語と述語の位置を占める構成要素と相関する。主語では、名詞句から動名詞句へ移行するにつれ、非特定性、非卓立性の度合いが強くなる。一方、述語では、普通名詞、所有代名詞、指示代名詞の順に聞き手の指示対象へのアクセス度が強くなっていき、それだけ特定性、卓立性の度合いも強化される。この移行の様子を図示すると、次のようになる。

(29) 主語と述語の情報特性の移行：



述語にくる焦点要素は、一般に、名詞であるが、形容詞や副詞でもよい。

以上の考察から、3人称所有後接語 n'は、それ自体が固有に持っている意味特性と、前後の情報構造の特性とを、段階的に変調させることで、異なる機能間のネットワークを構成することを明らかにした。同じ形式に対応する異なる機能は、個々別々に独立した項目として存在しているのではなく、いくつかの動機付けによって有意味に関連づけられているのである。

謝辞

* 本論文を完成させるのに当たり、2名の査読委員から貴重なご指摘をいただいた。この場を借りて、感謝申し上げたい。なお、論文の内容、誤記等については、一切の責任を著者が負うものである。

注

1) グロスの省略記号の対応は、次の通りである。

ABL: Ablative, ACC: Accusative, ASR: Assertive, CLC: Collective, CMP: Completive, CMT: Comitative, CND: Conditional, CST: Causative, D/L: Dative-Locative, EP: Epenthetic Vowel/Consonant, G: Genitive, HBT: Habitual, ICC: Imperfective Conjunctive Converbal, IMP: Imperfective, INS: Instrumental, NEG: Negative, NPS: Nonpast, OPT: Optative, PCC: Perfective Conjunctive Converbal, PF: Perfective, PL: Plural, POSS: Possessive, PPST: Perfective Past, PRS: Present, PST: Past, PSV: Passive, Q: Question Marker, QUK: Quick Action, RCP: Reciprocal, RFL: Reflexive-Possessive, TM: Time Conjunctive, VLT: Voluntative, VOC: Vocative, 1P: First Person Singular Possessive, 1PL: First Person Plural Possessive, 2P: Second Person Possessive, 3P: Third Person Singular Possessive, 3PL: Third Person Plural Possessive, 3SG: Third Singular, ∅: Zero Marker, +: Attributive Sign.

2) 引用文献の省略記号の対応は、次の通りである。

G&B: Gaunt, John and L. Bayarmandakh (2004), HA: Hangin, John G. (1997), K&Ts: Kullmann and D. Tserenpil (1996), L: Luvsanzav, Č. (ed.) (1976), MX: Byambacan, P. (ed.) (1979), ÖS: Ödriyn Sonin <Electronic Newspaper>, S&B: Sanders Alan J.K. and J. Bat-Ireedüi (1999), U: Šarav, C., et al. (1978).

3) モンゴル語には接尾辞の母音が語幹母音のタイプに応じて交替する音韻上の規則がある。この規則は母音調和と呼ばれ、右肩の数字で交替形の数を表す。

例 -aad⁴: -aad, -eed, -ood, -ööd. -uul²: -uul, -üül.

参考文献

- Byambacan, P. (ed.) (1979) *Mongol Xel 5 Angi*. Ulaanbaatar: BNMAU Ardiyn Bolovsroliyn Yaamniy Xevlel.
- Gaunt, John and L. Bayarmandakh. (2004) *Modern Mongolian: A Course-Book*. London and New York: Routledge.
- Halliday, M.A.K. (1967a) "Notes on Transitivity and Theme in English: Part 1," *Journal of Linguistics* 3, 37-81.
- (1967b) "Notes on Transitivity and Theme in English: Part 2," *Journal of Linguistics* 3, 199-244.
- (1968) "Notes on Transitivity and Theme in English: Part 3," *Journal of Linguistics* 4, 179-215.
- Hangin, John G. (1997) *Intermediate Mongolian*. Richmond: Curzon Press.
- 橋本邦彦 (1987) 「対格の目的語の意味論と機能論」 *モンゴル研究* 18, 94-113.
- (1999) 「直接目的語の指示性」 *室蘭工業大学紀要* 49, 159-173.
- (2006) 「モンゴル語三人称所有後接語の複数の機能について」 (印刷中).
- Kullmann, Rita and D. Tserenpil. (1996) *Mongolian Grammar*. Hong Kong: Jenseco.
- Lambrecht, Knud. (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Luvsanzav, Č. (ed.) (1976) *Mongol Xel Surax Bičig*. Ulaanbaatar: Sajd Nariyn Zövlöljijn Ulsiyn Deed, Tusgaj Dund, Texnik Mergežlijn Bolovsroliyn Xorooniy Xevlel.
- Sanders Alan, J.K. and Jantsangiin Bat-Ireedüi. (1999) *Colloquial Mongolian: The Complete Course for Beginners*. London and New York: Routledge.
- Šarav, S., Č. Luvsandende, D. Bazar and Ya. Gončig. (1978) *Unšix Bičig*. Ulaanbaatar: Ardiyn Bolovsroliyn

Yaamniy Xevlel.

Street, John C. (1963) *Khalkha Structure*. Bloomington: Indiana University.

山梨正明. (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版.

執筆者紹介

所属：室蘭工業大学共通講座

Email：kuni3587@mmm.muroran-it.ac.jp

専門分野：意味論、機能論、モンゴル語学